

2025.12.15

第28回子供に万引きをさせない連絡協議会

万引き防止の理解と対応

文教大学人間科学部 須藤 明

自己紹介

〈略歴〉

1982年4月 家庭裁判所調査官補として東京家裁に採用、2年後に家庭裁判所調査官に任官
以後、各地の家庭裁判所、裁判所職員総合研修所(教官、研究企画官)などで勤務
2010年4月 駒沢女子大学人文学部心理学科教授
2022年4月 文教大学人間科学部臨床心理学科教授～現在
※2025年4月から同臨床心理学科長を兼務

〈専門〉

犯罪心理学、家族心理学（公認心理師、臨床心理士）

〈主な社会活動〉

日本司法福祉学会会長、日本犯罪心理学会理事、日本公認心理師協会司法犯罪分野委員、埼玉県公認心理師協会会長、埼玉県いじめ問題外部専門委員、埼玉県児童虐待重大事例検証委員会副委員長、さいたま市スクールカウンセラー・スーパーバイザー等



〈研究活動〉

○心理学が刑事裁判にどのような貢献ができるのか、心理鑑定の実践を通じて研究するとともに、司法への心理学やソーシャルワーカーの関与について国際比較も行っている。

○主な論文や著書

- ・刑事裁判における人間行動科学の寄与、日本評論社,2018年2月（編著）
- ・少年非行の実務と情状鑑定から見た外国人少年の現状と課題、罪と罰56巻3号, 6-18, 日本刑事政策研究会, 2019年6月（単著）
- ・少年犯罪はどのように裁かれるのか、合同出版、2019年7月, （単著）
- ・クライエントと臨床家の交叉する視点を見つめて、臨床心理学第24巻2号、2024年3月、183-188（単著）
- ・社会調査と要保護性、季刊刑事弁護120、2024年10月、111-116（単著）
- ・学校関係者のための非行心理学入門、金子書房、2025年10月（単著）

非行とその背後にある課題

■ 生得的要因

- 衝動性の高さ、注意持続性の欠如、感覚過敏など

■ 心理的・発達的要因

- 自己肯定感の低さ、共感性の欠如、認知の歪み、価値観の偏り（暴力肯定ほか）、アタッチメント障害 など

■ 家庭環境の影響

- 家庭の不和、虐待、放任、経済的困窮
- 昨今では、小児期の逆境体験Adverse Childhood Experiences (ACEs) という概念で注目されている。

■ 学校・社会的要因

- 学業不振、学校不適応、いじめ、不良仲間との交遊など
- SNSやネットワーク型犯罪（殊詐欺の「受け子」「出し子」、闇バイトなどに巻き込まれるケースが増加）



非行・問題行動

非行の原因は一つに限定されるものではなく、複数の要因が相互に影響し合いながら形成されている。

非行・問題行動の背景にある“危機”を捉える視点

■ 行動への対応について

- ・表面的な行動を叱責するだけのかかわりは、必ずしも効果的とは言えない。かえって本人を「被害的」にさせてしまうなどのリスクもある。

■ 非行・問題行動の理解と支援の視点

- ・非行や問題行動は、本人が抱える危機のサインとして捉えることが支援の第一歩となる。
※身勝手な行動に見えても、「このままではいけない」という潜在的なニーズがある。

■ 対話の重要性と教育相談的視点

- ・非行や問題行動を契機に、児童・生徒との対話が支援の入り口となる。
- ・対応は生徒指導の枠にとどまらず、教育相談的な視点を取り入れることが重要である。

■ 指導と傾聴の両立～両者を統合したハイブリッド対応

- ・「話を聞くこと」と「指導すること」は、決して矛盾するものではない。

非行・問題行動を理解するための視点（須藤、2012）

1. 非行を通してどのような欲求充足を図ろうとしているのか
2. 非行を通してどのような不安を回避しようとしているのか
3. 非行の中にどのような対象関係（対人関係），行動パターンがあるのか
4. 自我のコントロール力がどの程度あるのか
5. 家族関係等，少年がよりどころとする支える環境の質はどうか

非行を通してどのような欲求充足を図ろうとしているのか

■ 欲求充足には、様々なレベルがある。

- ・直接的な欲求充足…「タダで手に入るから」、「腹が立ったので」等
- ・間接的な欲求充足…「仲間から認められたい、自分だってできる（承認欲求、劣等感の補償、自己拡大）」、「誰かに自分の苦しみを気づいてほしい（潜在的な援助希求）」等

〔事例〕

中学校時代の同級生と深夜の中学校に入り込んで建造物侵入という罪で捕まった16歳の女子少年A

Key Words：高校中退、家族との関係悪化、夜遊び、楽しかった中学校

◎現状の社会生活での不適応感や居場所のなさといったつらさから解放されたいという気持ちがあり、一時的に逃避する場として学校に侵入したと理解できた。

非行・問題行動を通してどのような不安を回避しようとしているのか

- 児童、生徒は、程度の差はあれ、成長過程の中で様々な不安に直面する。
- 不安への耐性レベル、対処スキルには個人差があり、本人を支える環境との関連で考える必要がある。環境面は年齢が低くなればなるほど重要になる。
- 不安のレベルは様々である。
 - 将来への漠然とした不安
 - 仲間外れにされる不安
 - 親から見捨てられる不安 etc
- 迫りくる不安に押しつぶされそうになり、それを回避しようと不適切な行動をとる場合がある。
- 先の事例Aで言えば、高校を中退し、先が見えない生活という不安を回避しようと夜遊びに逃避していたと考えられる。

非行・問題行動の中にどのような対象関係（対人関係）、行動パターンがあるのか

- 非行・問題行動は、単独であったり、徒党を組んだ複数であったりする。
- 同じ集団暴力行為でも、ふだんから上下関係、主従関係があったのか、こうした行動は普段の行動と連続線上にあるのか、といった視点で考える。
- 単独での場合、日常の振る舞いと一貫しないように見える行動もある。こうしたギャップは、何に起因しているのかを考えいく。

〔事例〕

高校生Bは、銀行強盗で逮捕された。遅刻や欠席がなく、おとなしく真面目なBがなぜ銀行強盗といった大それたことをしたのだと、家族や高校の教師は大変驚いた。

Key words：インターネットでの多額なゲーム課金

精神的な切迫感

ASD特性による柔軟性の欠如（Coping Skillの乏しさ）

自我のコントロール力とは

- 自我のコントロール力
 - 現実検討力
 - 感情のコントロール力
- 現実検討力は、例えば「悪いことをして捕まると高校を退学になってしまうかもしれない」など、行為とそれがもたらす現実的な影響を予測する中で、行為の妥当性を検討する力を指す。思いつきのままに万引きを繰り返していたとすれば、現実検討力は乏しいことになる。
- 感情のコントロールは、日常生活を送っていくうえで必要なスキルでもあり、発達に応じて身につけていくものと考えられる。例えば、カッとなつて暴力をふるったとした場合、暴力をふるうにしても躊躇はあったのかなど、感情とそれに関連する行為のつながりを詳細かつ丁寧にみていくことが大切となる。

児童・生徒の支える家族関係等の環境面はどうか

■ 家庭とアタッチメントの重要性

- 家庭から安心感・安全感が提供されることで、身体的・情緒的な成長が促される。
- 親の情緒的応答性や共感的態度は、基本的信頼感、情緒の安定、社会化（規範意識の内面化、ソーシャル・スキル）の発達に寄与する。

■ アタッチメントの形成と内的作業モデル

- アタッチメント (Bowlby, 1969) は、危機時に子どもが養育者に「引っつく」行動に由来する概念。幼少期には身体的接触を通じて形成されるが、成長とともに親との関係は心的表象として内在化される内的作業モデル (Internal Working Model) 。

■ 非行臨床におけるアタッチメントの視点

- 虐待や不適切な養育環境により、アタッチメント関係が十分に形成されないまま思春期を迎える子どもも多い。こうした子どもは、安心感や安全感を持てず、不良交友や不適切な異性関係に巻き込まれるリスクが高まる。

万引き事例で考える

■ 事例の概要

A子は、高校1年生。5月の連休中、高校で友人となつたB子、C子と一緒に遊びに出掛けた際、デパート内でアクセサリーその他数点（3000円相当）を万引きした。実行犯はB子とC子で、A子は見張り役。警察の調べで、万引き経験のあるB子が万引きを言い出し、残りの二人も同調したことが判明した。A子は、「B子から簡単に盗めると言われた。悪いことだと分かっていたけど、すごく可愛く欲しかったアクセサリーがあったので、じゃあ大丈夫だろうと考えてしまった。ただ、これまで実際にやったことはなかつたし、B子に『見張っていてくれればいい』と言われたので、その場に立つていただけ。今はすごく反省している。」と述べていた。

A子の家庭は、会社員の父、パート勤務の母、中学2年の弟の4人構成。中学校時代は、陸上部に所属。高校は第一志望に落ちてしまつたため、滑り止めで受けた現在の高校に進学した。家族について、「両親は普通かな。弟はとても頭が良くて、親は将来医者にしたいみたい。今回の件で、両親からきつく叱られた。泣いている母の姿を見たときには、本当に悪いことをしてしまつたと思った。」と述べていた。

想像力を働かせながら、どのようなことが考えられるか、仮説を検討してみましょう。

1. 非行を通してどのような欲求充足を図ろうとしているのか

- ・欲しかったアクセサリーがタダで手に入る。
- ・仲間としての結束を高められる。
- ・一度は体験したいとの思いを果せる。
- ・家族の関心を惹きたい などなど

2. 非行を通してどのような不安を回避しようとしているのか

- ・希望の高校ではなかったという落ち込みから、仲間との交遊で現実から目をそらしていた結果、万引きに至った。
- ・仲間外れにされたくないという不安から友人の誘いに同調した。
- ・軽いうつ状態があり、行動化によって気分転換を図ろうとした。 など

3. 非行の中にどのような対象関係（対人関係）, 行動パターンがあるのか
・仲間内ではリーダーシップをとるよりも、同調・追従していくタイプではないか。

4. 自我のコントロール力がどの程度あるのか
・万引きに対する多少の躊躇はあったようだが、友人の誘いにさして抵抗なく応じている。自ら積極的に逸脱するタイプではないが、周囲に流されやすいという自我の弱さがうかがわれる。
5. 家族関係等、少年がよりどころとする関係基盤（支える環境）の質はどうか
・優秀な弟への劣等感があり、親の期待も弟に向いていると感じているため、家庭内で寂しさを感じている。
・母への申し訳なさを口にしており、親との情緒的なつながりは維持されているのではないか。

動機から見た万引きの類型(須藤, 2012)

	動機	特徴
功利型	「お金を払うのが もったいない」など	思春期に出現することが多い。友人からの影響も受けていることがある。
同調型	「友人に誘われて」など	思春期に典型的に見られる。皆がやっているからと合理化しやすい。
代償型	愛情不足を埋め合わせとして	児童期前半に生じることが多い。食料品や玩具などの万引きに現われる。
関心喚起型	親や教師の関心を惹こうとして	児童期から思春期前半に見られる。怒りの感情が隠れている場合あり。
情緒表現型	「むしゃくしゃして」など感情の発露として	いじめや受験等に伴うストレスの発散や、持つて行き場のない怒りの表現

おわりに：万引きは非行の入口だが…

- 万引きといつても、そこに至る経緯や動機は様々である。初期の段階での的確な対応がとても重要になってくる。
- 行動面に目を奪われず、行動の意味やその背後にある課題を考えていく必要がある。行動面を叱るだけではなく、万引き行動を契機とした「対話」がとても重要になってくる。
- 特に児童の万引きには、家庭環境その他の置かれた環境要因の影響を強く受けている場合があり、表面的に叱るだけの対応に終始すると、一時的に問題行動は収束したように見えても、思春期以降で再燃してしまう。
- 話を聴く（傾聴）は、実のところ、とても難しい。ついつい、「なぜ？」、「どうして？」という問い合わせてしまう。こうした対応は、児童や生徒の心を閉ざしてしまう。
- 「お菓子が欲しかった」といった感情を叱っても効果は期待できない。要は、こうした感情に伴う「行動選択」が問題なのであり、そこに焦点をあてて一緒に考えていくアプローチが基本になる。
- なお、当然ながら万引きに至らないための防止教育が重要なのは言うまでもない。